

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3月 11日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	ウメノ アイコ	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学研究科 人間発達学専攻 博士課程後期 3年次
氏 名	梅野 愛子		
指導教員氏名	川端 有子	指導教員 所属・職名	人間生活学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	ショーン・タン作品におけるリアリズムと言語の与奪の関係性		

## 1. 研究成果の概要

\*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式改変・追加不可。以下同様)

擬人化は、「言葉」を付与することによってあらゆる事物や生物が人間と等価に会話をすることを可能にし、児童文学の作品世界を広げてきた。ショーン・タンの作品には、動物から物体までさまざまなキャラクターが登場するが、その際、彼らは擬人化されているにも関わらず、言葉を発しないキャラクターが多く見受けられる。タンの作品においては、むしろ言語を与えないことで、彼らの行為主体とはまた別の主体性を考慮に入れた表現方法なのではないかと考え、今年度は*Tales from the Inner City*(2018)から、オウムの章とクマの章を中心に研究を行った。

## 2. 今年度の研究報告

\*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的      ②研究の方法      ③研究成果・今後の展望

### ①研究の目的

今年度の研究目的は、2023年夏行われた国際学会での発表を主眼におき、2022年度から考察していたショーン・タン作品の擬人化における言語の与奪の問題に一定の結論を導き出すことだった。前年度までは言語の与奪のみに焦点を当てていたが、今年度はこれに加えて*Tales from the Inner City*での動物の描かれ方のリアリズムに注目し、ショーン・タン作品におけるオウムの章の分析を行った。これまでの他者論を軸としたタン作品研究を説明した上で、タンが擬人化の際に言語を付与しない理由を同書のイラストのリアリズムから分析する試みである。ここでは、テキスト上の無言の理由以前に、イラストのリアリズムがその描き方の方針をすでに体現しているものと考え、擬人化以前のイラストによる「受肉」を説明し、タンが言語をいかに「壁」として捉えているかを探った。

また、この発表で深めた考察に基づき、「クマ」の章に関する考察の論文化を目指した。クマの章においての主眼は、同章が人間との法廷対立を描いていることから、法の力と言語の行為遂行性の力の観点から分析を試み、「なぜクマは（裁判が優位に進んでいたにもかかわらず）殺されたのか」という問いへの答えを探ることである。

さらに、本年度は、タン作品がここ数十年ほどの児童文学研究の方法論的潮流とともに研究されてきたことから、これまでの先行研究の議論を研究ノートとしてまとめる予定であった。

### ②研究の方法

今年度の目的だった国際学会でのプレゼンテーションは、擬人化をしないリアリズムに徹したタンの動物の描き方に対し、動物が児童書のなかでイラストレーションとして登場すること自体を、「受肉」であると考え、描写の表現そのものに焦点を当てた。さらに、児童書の擬人化に関しては多数の先行研究があり、主だった先行研究を洗い出すこと、そのなかで、「(動物に) 言葉を与えることが彼らを行為主体にする」という言葉が、擬人化の考え方の基本となっていたことから、この、動物が人間の言葉によって行為主体になる構造への問い直しに焦点を当てた。

第二の目的であったクマの章の論文化に際しては、主な理論的枠組みを、デリダの主張した肉食ーファロスーロゴス中心主義をめぐる動物と獣性の議論から援用して論を構築した。

## 今年度の研究報告（つづき）

### ③研究成果・今後の展望

#### i. IRISCL研究大会発表

2023年8月にアメリカで開催された研究大会でのオンライン発表を行なった。本発表タイトルは、「Exploring Realism and Voiceless Animals in *Tales from the Inner City* by Shaun Tan」とし、*The Inner City*におけるリアリズムと擬人化の傾向について考察した。分析の目的は、タンが動物たちの安易な擬人化を行わない理由を探ることにある。まず、児童文学においてイラストの描写傾向にすでに動物の位置づけの表明がなされていること、よって、タンがリアリズムのテクニックこそが彼の立場の表れであることを確認した。そのように考えれば、イラストは児童文学における動物というキャラクターの「受肉」なのであり、テキストに先行して性格付けがなされている。加えて、「（動物に）言葉を与えることが彼らを行為主体にする」という児童文学における動物擬人化の意義に対し、タンが動物に人間の言葉が付与されていないことの背景を考察するべく、特に言葉に焦点を当てているオウムの章を中心に、タンが描き出そうとしている言葉を介さないコミュニケーションの様相を探った。

#### ii. クマの章の論文化

昨年度の日本児童文学学会定例会で行った*The Inner City*のクマの章に関する発表を論文化した。議論は以下の2つの論点で編んだ。ひとつには、熊という動物が西欧史において神であり森の王であったところから転落した重要な動物であることと、アイヌなどの北方先住民の伝説や神話などで神としてあがめられてきた点を踏まえた。次に、タンが同章において行っているさまざまな二項対立において、クマが最終的に言葉の権威＝法体系の力を借りて訴え出たことの有効性を問うた。人間の主権が、肉食と供犠という犠牲の上に成立している暴力に基づいていることから、法は力の一撃によって成立した暴力性を帯びていると論じたデリダの視点と比較すると、同章のクマの法は、地球全体の自然物を根拠に成立している。クマが最後に殺されてしまう結末は、まさにこの肉食－ファロス－ロゴス中心主義を体現した結末だと言える。

#### iii. その他 代理母－代理娘関係に関する論文

修士論文執筆時に英米児童文学における娘－母－祖母の関係性の描かれ方を考察していたことから、『わたしのいどんだ戦い1940年』（原題：*The War Finally I Won*）における代理母－代理娘関係に焦点を当て、主人公エイダと後見人となったスーザンの関係性が母娘として成立するために、「代理母」が要請される力学を分析してみた。こじれた母娘関係がテーマとなる児童文学作品では、時に母親の代わりをする女性キャラクターを立てる傾向があるが、同書はこの「母／代理母／娘」の三者の関係性を考察するにあたって、非常に丁寧で緻密な描かれ方をした好例であったことから、同書の代理母－代理娘関係に注目した。これにより、代理母がいかにプレティーンの主人公にとって母性に対する反発と肯定を乗り越え、実際の母親との関係を調停するかを明らかにした。

来年度は、タンが一番の代表作である『アライバル』のなかに登場するオタマジャクシのような不思議な生物（通称ディギー）について考察するべく、ケアの観点から主人公に寄りそうキャラクターについて分析を試みる。さらに、これまでの考察の論点を支えるため別の作家の絵本からも分析を行い、博士論文の骨組みを支える補強とする。

### 3. 成果発表（投稿中も含む）

\*研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

①－1：梅野愛子「母殺しに代えて：『わたしがいどんだ戦い1940年』に見る代理母－代理娘関係」

『日本女子大学大学院紀要 人間生活学研究科』30号、2023年、11－20頁

－2：Aiko Umeno ‘Why Were Bears Got Killed: Examining Force of Law in the Bear Chapter of *Tales from the Inner City*’ [※オーストラリア児童文学学会紀要*Papers*に今月末投稿予定・掲載可否未定]

② 「Exploring Realism and Voiceless Animals in *Tales from the Inner City* by Shaun Tan」 International Research Society for Children’s Literature Congress 2023 – Ecologies of Childhood -, 2023年8月12－17日、カリフォルニア大学サンタバーバラ校及びオンライン

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

梅野 愛子

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3 月 11 日

期 間	2023年度	配分額	50千円
フリガナ	ムライアカリ	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学研究科 人間発達学専攻 博士課程後期 3年次
氏 名	村井 あかり		
指導教員氏名	岡本 吉生	指導教員 所属・職名	人間生活学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	向社会的行動に第三者性が加わるときの葛藤場面に関する考察		

**1. 研究成果の概要**  
 \*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式改変・追加不可。以下同様)

他者の利益となる行動は「向社会的行動」と言われるが、一般的に「いい子」と呼ばれる者は「いい子」の振る舞いとして「向社会的行動」を行っていると考えられる。今年度は他者のための行動をしていると想定される「いい子」に焦点を当て、「いい子」の葛藤について研究することを目的とした。複数回実施したフォーカスグループインタビュー調査について、質的分析を行った結果、いい子傾向が高い者が周りの期待に応え自己の気持ちを抑えることで内的葛藤と外的葛藤を引き起こしており、葛藤状態を解消するために更なるいい子を演じるという循環のプロセスが推察された。

**2. 今年度の研究報告**  
 \*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。  
 ①研究の目的      ②研究の方法      ③研究成果・今後の展望

①研究の目的

- 定義  
「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとし、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求に応える努力を行う者」(石津・安保、2008)をいい子と定義する。
- 仮説  
いい子は周囲に合わせて適応しようとする一方で、自分を偽ることに對する嫌悪感や他者から見放されることへの不安といった周囲から容易に判別できないストレスを内在する可能性がある(内的葛藤)。また、いい子の行動が「よいい子」の評価を得られないとき、自己評価と他者からの評価が一致せず、何らかの葛藤を引き起こしている場合があると考えられる(外的葛藤)。
- 目的  
なぜいい子が無理をしてまでいい子のままでいようとするのか、またいい子はどのような内的・外的葛藤を抱えているのかを明らかにし、その心理的メカニズムを考察することを目的とする。

②研究の方法

- フォーカスグループインタビュー調査  
 1) 調査協力者：女子大学生 14名 (年齢  $M=23.7$ 、 $SD=3.8$ )  
 2) 調査方法：フォーカスグループインタビューを3回実施した。調査協力者へ、本調査の目的はいい子に関する具体的なエピソードを語ってもらうことであると説明し、倫理的配慮の説明を行い調査協力の承諾を得たうえで調査を開始した。なお、いい子については、先入観を与えないようにするために「周りの期待に応えようとしたり、自分の気持ちを抑えようとしたりする人」と説明した。いい子の特徴に該当する行動をとったことがあるかどうかを尋ね、行動に関するエピソードや行動の理由、当時の感情などについて質問した。

今年度の研究報告（つづき）

③研究成果・今後の展望

今年度は、実施したフォーカスグループインタビュー調査（以下、FGIとする）の分析を主に行った。

● 分析方法

FGIの録音データから逐語録を作成した（以下、これを言語データとする）。調査によって得られたすべての言語データを分析の対象とし、調査協力者の属性に大きな偏りがないことから、第1回～第3回のFGIのすべての言語データの一つにまとめ分析を行った。分析手続きについて、まず、言語データを意味のまとまりごとに切片化し、同じ意味を持つ切片化データの一つにまとめ、内容を適切に表す言葉に置き換え「概念」を生成した。これを「小カテゴリ」とし、次に、生成された概念同士の類似性や相違性を検討し、関連する複数の概念からより上位の概念を生成した。一つの概念からより上位の概念を生成できる場合も含め、これを「中カテゴリ」としてまとめた。そして、「中カテゴリ」の概念の関係性を検討しグループ化を行い、見出しをつけ命名した。これを「大カテゴリ」とした。「小カテゴリ・中カテゴリ・大カテゴリ」の順に階層性が明確になるよう整理した。

● 結果

分析の結果、小カテゴリにまとめられる40個の概念、中カテゴリにまとめられる21個の概念を生成し、大カテゴリとして6つの見出しを命名した。

● 考察

生成された概念同士のつながりを検討し「いい子の行動モデル」の作図を試みた（図1）。図の矢印は、中カテゴリの概念同士の関係の方向を表す。言語データに立ち返りながら概念同士の関係を吟味し、いい子がいい子でいようとする理由といい子が抱えていると思われる葛藤について考察した。いい子傾向が高い者が周りの期待に応え自己の気持ちを抑えることで内的葛藤と外的葛藤を引き起こしており、葛藤状態を解消するために更なるいい子を演じるという循環のプロセスが推察された。一方で、いい子であることによって自己が守られるため、内的葛藤を自覚しながらも葛藤を抑圧し、いい子として振舞うことをやめないという可能性もあることが明らかになった。

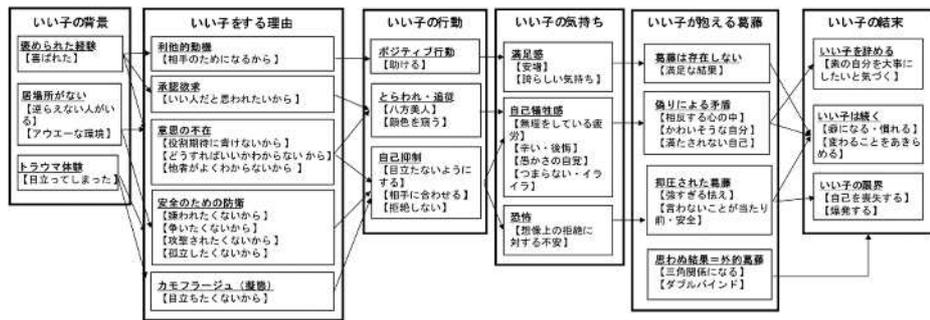


図1 いい子の行動モデル

3. 成果発表（投稿中も含む）

\* 研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

①なし

② 村井あかり・関谷美希、「いい子」の傾向がある者の葛藤に関する考察、日本家政学会第75回大会、2023年5月28日、東京家政大学

関谷美希・村井あかり・山口舞・岡本吉生、「いい子」傾向がある者の心理的不適応について、日本応用心理学会第89回大会、2023年8月27日、亜細亜大学

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

村井 あかり

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3月 11日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	エビヅカ ヒナコ	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学研究科 人間発達学専攻 博士課程後期 3年次
氏 名	海老塚 日菜子		
指導教員氏名	川端 有子	指導教員 所属・職名	人間生活学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	児童文学の一人称視点の語りにおける騙りの分析		

## 1. 研究成果の概要

\*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式改変・追加不可。以下同様)

本研究は、イギリス児童文学の一人称視点の作品を題材に、その作品内で語り手が及ぼす作用及び語り手の語る意義を明らかにし、イギリスにおける子ども観の変遷を考察することを目的とする。今年度は主にエイダン・チェンバーズ著、『二つの旅の終わりに』における語りの分析をおこなった。前年度に引き続き、語り手が語る意義を明らかにし、その分析結果をもとにさらにその作品自体に語り手が与える役割を明らかにする物語論を用いた作品論的分析をした。本作では語り手が語る意義に加えて、想定された読者が読むことで起こる付加価値など、語りと読者の関係性について明らかにすることができた。

## 2. 今年度の研究報告

\*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的 ②研究の方法 ③研究成果・今後の展望

### ①研究の目的

本研究は、イギリス児童文学の一人称視点の語りを分析し、物語論の視点から作品内における語り手が果たす役割を明らかにすること、また、作品分析の視点からなぜその語り手が語るのかを考察し、そこからイギリスの児童文学作家がどのように子どもをとらえてきたか、に迫ることを目的としている。また、語りはその実験的に扱いやすいという性質から、その形式の多様化・多層化が進んでいるのではないかと、という仮説にしたがい、物語の語りの形式の種類についても注目する。

本年度においては、エイダン・チェンバーズ『二つの旅の終わりに』を中心に、語り手がその物語を語る意義とその語り手が語る際に何を意図的にもしくは無意識におこなっているか、という語り手の方法、およびそうした語り手がその作品にどのような影響をもたらしているか、の三要素の關係に注目をした。これは前年度に研究をとおして気づきを得た「物語論を用いた作品論的分析」の方法によって、本来の目的である語り手と作品の關係性の研究が達成できるのではないかと、という仮定に基づくものである。

また、昨年度に引き続き一般小説の「信頼できない語り手」を分析したものを参考に「信頼できない語り手」をはじめとした物語論的視座の基礎を強化する。

### ②研究の方法

本年度は主に現代のイギリス児童文学作品を中心に、作品の精読・分析を行なった。

各作品の分析を行う際には、その作品において語り手がどのような役割を果たしているか、という物語論としての分析と、その作品の語り手は語りを行うことでどのような作用を受けているか、という作品論的分析の二つの視点から作品の分析を試みた。また、語り手の語る意義に注目し、その語る方法や語りの影響を整理することで、語り手の意識の種類を探り、具体的な視座を得ることを目標とした。

また、児童文学においては物語論を手法とした先行研究がほとんど見受けられないため、一般小説を対象作品とした物語論的アプローチをとった研究を参照とし、児童文学の分野に適用していく。

## 今年度の研究報告（つづき）

### ③研究成果・今後の展望

本年度は、2023年11月12日に開催された第53回英語圏児童文学学会研究大会において「エイダン・チェンバーズ『二つの旅の終わりに』における多層的語りの構造」をテーマに発表する機会を得た。本発表ではオランダの女性ヘールトラウの手記の形をとる語りに注目をした。語り手の意識、語り方、語り手が及ぼす作用を整理しながら研究を進めた。この三要素について明らかになったのは以下のことである。

まず、語り手の意識については、語り手が語る中でその意識が変わっていったことが明らかになった。ヘールトラウは「かつての恋人との思い出をその孫のために永遠に残してあげたい」「不貞の関係にあったことを正妻に告白し、罪を償いたい」という意識から「自身とかつての恋人との思い出を永遠に残しておきたい」という意識に語る目的が変化している。

次に語り方については、あえて伏線をはって、重大なことのようふたりの恋愛関係を強調するような語りの操作がみられた。また、その手記を渡したのは計画的安楽死の直前であり、そこから一方的に自分の視点からだけの物語を渡したまま他者からの訂正を受けないようにする語り方が明らかになった。

最後にこの意識と方法から、ヘールトラウの傲慢さをほのめかす作用や、かつての恋人のヘールトラウとの生活の奥に垣間見える、正妻とのもう一つの人生を匂わせる作用があるのではないかと考えた。

本発表ではこの三要素を含めて作品を改めて見ることで、作品そのものの多層的な奥行きが語りによって生み出されているのではないかと、という結論を導き出した。また、ヘールトラウが恋人との時間を永遠に残す、という目的で語った手記も想定された読者が読むことで、第二次世界大戦中の一般の女性の暮らしを知ることができる効果が生まれている。これは、語り手の意識とは別に起こった副産物的な効果であり、語り手と読者の関係性について新たな視座を得ることができた。

この研究から、一人称語りの作品における作品性とは語り手の語り方（語りの操作）によって印象付けられることが多く、また、語り手が語る際にその方法を選ぶのは語り手の意識（語りの目的）が大きく作用していることを改めて確認した。つまり、語りの形式の分類という視点においてはこの語り手の目的に基づくことが有用な分類方法であることがわかった。今年度までに「自分が物語を語っているという意識を強く持っている語り手」（例：『二つの旅の終わりに』『二つの旅の終わりに』『宝さがしの子どもたち』）を主に取り扱ってきた。今後の展望としては、「語っている意識が薄い語り手」（例：『フローラ』）を分析するためにまずは対象となる作品の精査をはじめたい。また、「意識の強い語り手」についてもさらに「商業的な作家として作品を残したい語り手」（例：『宝さがしの子どもたち』『この湖にボート禁止』）や「自分（もしくは近い他者）の特別な体験を残したい語り手」（例：『二つの旅の終わりに』『二つの旅の終わりに』）など、さらに分類できると予想される。語り手の意識をもとに分類・類型化をおこない、その語りから物語に起こる作用を明らかにしていく。

### 3. 成果発表（投稿中も含む）

\*研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

①  
なし

②

海老塚日菜子「エイダン・チェンバーズ『二つの旅の終わりに』における多層的語りの構造」、第53回英語圏児童文学学会研究大会、2023年11月12日、日本女子大学

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

海老塚 日菜子

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3月 8日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	セキヤ ミキ	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学研究科 人間発達学専攻 博士課程後期 2年次
氏 名	関谷 美希		
指導教員氏名	岡本 吉生	指導教員 所属・職名	人間生活学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	自尊感情モデルの再検討		

**1. 研究成果の概要**

\*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式改変・追加不可。以下同様)

「いい子」を過剰適応傾向の高い者と定義し、利己的動機によって生じる過剰適応のプロセスと自尊感情の関連を検討した。自己を傷つきから守るために過剰適応的に振る舞う者は、自分の意見を抑制したり他者の意見を過剰に気にすることで内的葛藤を抱え、自尊感情が低下しているにも関わらず、過剰適応を辞めず「いい子」を継続する場合がある。その循環性のメカニズムを質問紙調査によって明らかにした。つまり、自分のためにとっての行動で自分が苦しむという悪循環のなかで、このプロセスから抜け出すこともできず、いい子で居続けている者が存在する可能性がある。この悪循環には、いい子という存在やその利他的行動を周囲が安直に褒め、「いい子だね」「いい行動をしたね」と評価を与えていることも影響している場合がある。

**2. 今年度の研究報告**

\*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的      ②研究の方法      ③研究成果・今後の展望

**① 研究の目的**

一見適応しているように見える「いい子」が、ストレスや不安といった表面化されにくい問題を内包していることは既に多くの研究で示されているが、いい子として振る舞う根底には「嫌われたくない」「傷つきたくない」といった動機が存在することも指摘されている。したがって、他者を気遣い思いやっているように見える「いい子」の行動には、「自分が相手からどう見られるか」「自分が嫌われたり傷つかないためにどうすればいいか」といった利己的な打算を含む動機が含まれており、その根底には振れた自己愛が関連している可能性がある。しかし、こうしたいい子の利己性について論じた研究は少なく、自己を傷つきから守るための利己的動機が他者を気遣い思いやる利他的行動としてとらえられ、その行動は安直に評価されやすい。その一方で、いい子の心理的な不適応が明らかになっている。以上のことから、「嫌われたくない」「傷つきたくない」という自己愛に基づく利己的動機がいい子としての行動に繋がり、結果として心理的不適応を引き起こしていると仮定する。本研究の目的は、利他的行動をとっているため見過ごされやすいいい子の利己性に焦点を当て、行動の根底にある動機やその結果を学術的に明らかにすることである。これにより、表面上は適応的ないいい子が陥る不適応のメカニズムを、心理学的視点から紐解くための一助となることを期待する。

**② 研究の方法**

目的に沿って、20～50代の男女445名を対象に、インターネットのアンケートフォームを利用したクローズド型質問紙調査を2023年5月に実施した。20～50代の男女445名程度にアンケートを配布し、趣旨や目的に同意を得られた場合に回答に進んでもらった。

**質問紙調査の構成**

フェイスシート、過剰適応尺度、自己愛的脆弱性尺度短縮版、Stress Response Scale-18(SRS-18)、自尊感情尺度を使用した。各尺度については、「以下の文は、あなたにどれくらい当てはまりますか。」という教示文を提示し、それぞれの項目について「あてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」の5件法で回答する形式とした。

## 今年度の研究報告（つづき）

### ③ 研究成果・今後の展望

SPSS による分析結果から、自己愛傾向が過剰適応行動に影響を与えていることが示され、いい子という利他的行動の動機には利己性が含まれていることが明らかになった。

つまり、「もっと大切にしてほしい、認めてほしい」「傷つきを癒してほしい」といった、自分自身を傷つきから守ろうとする自己愛が、「引込み事案になる」「意見を変えてしまう」「他者の言うことに従う」といったいい子の行動に繋がっていた。言い換えれば、いい子は、他者からの承認や愛情を求め、疎外されたり傷つけられたりしないために、自己を抑制し周囲に従っているといえる。この結果は、他者を尊重し思いやっているように見えるいい子が、実際は他者ではなく自分のことを気にしているという榎本(2018)や斎藤(2022)の指摘と合致する。以上のことから、自分が嫌われたり傷つけられたりすることを避け、大切にしてもらうためにいい子の行動をとり、その行動は受け手や第三者からは「自分の気持ちを抑えてでも他者を尊重し思いやる利他的な行動」として評価される場合があるといえる。しかし、自分のために行動しているにも関わらず「利他的ないい子」という評価を受け続ける場合、「利己的な自分」と「利他的な子という評価」の矛盾に葛藤が生じ、ストレス反応が高まったり、これでよいと自分を受け入れることが難しくなるかもしれない。あるいは、「利己的な自分」に目を向けず自己欺瞞に陥り、自己の喪失や乖離といった臨床的な病理に発展する可能性もあるだろう。本心を隠したうわべの会話をする中で、他者との信頼できる関係性を築くことができない場合も考えられる。加えて、村井ら(2023)の研究結果では「意見を言うべきディスカッションの場でも、嫌われることを恐れて意見を言わないようにする」といったいい子の行動が示されており、「他者ではなく自分しか見えていない状態であるため、何が他者のためになる行動なのかを正しく認識できていない」と指摘されている。この場合、発言を求めている第三者の視点では「悪い子」としてとらえられる可能性もあるだろう。そのため、いい子であるはずが実際はその場に適した行動ができておらず、気が付けば他者から嫌われているという外的なトラブルを生じさせる可能性がある。このように、一見問題なく適応しているいい子は、自分の内側あるいは外側の世界で何らかの不適応を引き起こしている可能性があり、その不適応は、他者や周囲を慮っているように見える利他的な行動と、疎外されたり傷つけられたりせず認められ愛されるためという利己的な動機のねじれが影響している場合がある。したがって、「誰から見ても利他的ないい子」は存在せず、どこかで歪みが生じているといえる。その歪みは注目されにくく、周囲が断片的に利他的な場面を切り取り、安易に評価を与えることで、より強固なものになっていく可能性もある。これらのことから、自分のために行動しているにも関わらず不適応を起こしているいい子のメカニズムが示唆された。

以上により、利他的行動をとるいい子の根底には、「嫌われたくない」「傷つきたくない」という自己愛に基づく利己的動機が潜んでいるという仮説は支持され、いい子が陥る悪循環のプロセスが明らかになったといえる。今後は、発達段階におけるいい子の行動特徴やその違いを検討し、いい子の不適応をより広く検討していくことが望まれる。

### 3. 成果発表（投稿中も含む）

\* 研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

①  
なし

②

- ・「いい子」の傾向がある者の葛藤に関する考察（共同研究）  
（日本家政学会第75回大会、2023年5月26日、東京家政大学 板橋キャンパス）
- ・「いい子」傾向がある者の心理的不適応について（共同研究・筆頭）  
（日本応用心理学会第89回大会、2023年8月26日、亜細亜大学 武蔵野キャンパス）

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

関谷 美希

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3月 7日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	イマムラトモコ	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学研究科 人間発達学専攻 博士課程後期 2年次
氏 名	今村友子		
指導教員氏名	岡本吉生	指導教員 所属・職名	家政学部児童学科・教授
研究課題名 ※40字以内	自己表現に苦手意識を持つ人の感情・思考表現と自己成長へのアートの可能性		

## 1. 研究成果の概要

\*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。（様式改変・追加不可。以下同様）

本研究は、社会問題に対する自身の問題意識を深めるためにアート思考と描画を用いるアプローチの効果を探究した。私立高校の生徒を対象に実施したアートワークショップでは、参加者である生徒たちは自らの感覚を信じ、内面の言葉にならない思いを視覚化することから始め、描いた絵を通して自由に発言し、相互のフィードバックを経て深い自己理解と自己表現を促進する。このプロセスは、参加者が自分自身と未来について深く考え、自分に合った情熱を持って取り組める活動を見つけることを支援する。研究成果は、アートが自己探索と問題意識の探索に有効であり、プレゼンテーション能力の向上にも寄与することを示唆している。

## 2. 今年度の研究報告

\*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的      ②研究の方法      ③研究成果・今後の展望

### ① 研究の目的

本研究の目的は、アートと教育における二つの重要な側面を探究することにある。第一の目的は、アート思考と描画を通じて生徒たちの内面にある思いや感情を活性化し、それらを表現する過程を明らかにすることである。このアプローチにおいて、参加者の創造性や感受性がどのように刺激され、彼らの自己の内面世界とのつながりを強化する手助けとなるのかを検証する。アートをを用いることで、生徒たちが自己の感情や思考をより豊かに、かつ具体的に表現できるようになるのか、そのプロセスを詳細に分析する。第二の目的は、ワークショップの中で行われる描画活動が、生徒たちの非言語的な感情や考えを言語化するのにどれほど効果的であるかを検証し、考察することである。特に、描画という行為が、抽象的な感情や複雑な思考を言葉に変換するブリッジとして機能するか、またそのプロセスが生徒たちの自己表現やコミュニケーションのスキルにどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。さらに、この言語化の過程が社会問題に対する洞察力や批判的思考能力の向上にどのように寄与するかにも焦点を当てる。

### ② 研究の方法

研究方法として、SDGs や国際情勢に関する授業を受講した県内私立高校のアカデミックフロンティアコースに在籍する7名の生徒と4名の起業家メンターを対象に、アート思考と描画を組み合わせたワークショップを実施した。生徒たちは社会課題への関心と疑問を有し、解決に向けた行動意欲が高いと同時に、理想の未来を描き、それを実現しようとする意志を持つ者たちである。ワークショップは、参加者の自由意志を尊重し、話したくない内容については発言を強制しない環境を提供しながら進行された。生徒たちは、個々の感覚に焦点を当て、内面の思いをビジュアルに変換し、その描画を通して自由にアイデアを共有し、他の参加者やメンター、研究実施者からのフィードバックを受けながら対話を深めた。このプロセスはビデオ撮影により記録され、参加生徒の発言、描画、アンケート結果を分析することで、彼らの思考の変化とその検証、考察を行った。

## 今年度の研究報告（つづき）

### ③ 研究成果・今後の展望

アート思考と描画を活用したワークショップを通して、生徒たちの自己理解と社会問題に対する洞察力の向上を促進するプロセスが確認された。内面を視覚化するアートの手法によって、彼らは自身の感情や思考を深く探究し、個々の個性や問題意識の多様性が表出した。また、彼らは描画と発言を通して、自己の強みや弱み、価値観や情熱を明確に把握し、それらを社会問題解決の取り組みに結びつけることができた。アートを通して自分自身や社会問題に対する新たな見方を発見し、自分の考えや感情をより明確に表現できるようになったと彼らは報告している。

アートによる表現手法が、彼らの自己理解を深めるだけでなく、社会問題に対する見識を形成する上でも重要な役割を果たしていること、また、このような自己表現がプレゼンテーション能力の強化にも効果的であることが示唆された。

これらから、本研究が示したアートの活用は、自己理解を促し、社会的な課題への主体的な取り組みを支援する有望な手法であると考えられる。アートを介した表現が、言葉だけでは伝えにくい深い感情や思考を可視化し、他者とのコミュニケーションを豊かにすることが確認されたため、このアプローチをさらに深化させる研究を進めていく価値があると考えられる。

生徒とメンターの双方からのフィードバックを活用し、ワークショップの効果を高めるための改善点を探り、より効果的な自己表現の手法を開発することも今後の課題として挙げられる。さらに、アートワークショップの形式や内容を多様化し、生徒たちが社会問題に対してより積極的に、創造的に取り組めるようなプログラムの開発が望まれる。

今後はこのアプローチを発展させ、自己理解と社会問題に対する関与を促進するアートワークショップを拡充し、多くの学生への適用を目指し、彼らの起業家精神の育成を図りたい。

### 3. 成果発表（投稿中も含む）

\*研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

① 今村友子「育児不安に悩む母親の内に新たな母親像を育んでいく関わり～感情の言語化を促す描画の可能性～」日本描画テスト・描画療学会編 臨床描画研究に投稿中。今村友子「不登校の子どもと母親への心理的サポート～描画によるアプローチ～」日本芸術療学会誌に投稿中。今村友子「母親の思考傾向が子どもの不登校現象に与える影響～感情表現を促す描画の可能性～」日本芸術療学会誌に投稿中。

② 日本芸術療学会 2023年9月2日・3日 東洋大学 川越キャンパスにて「アートセラピーを用いた不登校の本人と母親の心理的变化の検討」発表。

日本描画テスト・描画療学会 2023年11月4日・5日 明治大学 駿河台キャンパスにて「育児不安に悩む母親の内に新たな母親像を育んでいく関わり～感情の言語化を促す描画の可能性～」発表。

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

今村 友子

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3月 8日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	ヨウ ユメ	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学研究科 人間発達学専攻 博士課程後期 2 年次
氏 名	楊 夢		
指導教員氏名	岡本 吉生	指導教員 所属・職名	人間生活学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	犯罪と逸脱行為の関連性 ～入所者と一般大学生の成長経路の比較を通して～		

## 1. 研究成果の概要

\*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。（様式改変・追加不可。以下同様）

逸脱は、ある社会の規範や文化的目標から外れた行為や出来事と定義されている。今年度の研究は、青少年の逸脱行為が減少傾向にあるにもかかわらず、多くの人々がその発生率を高く感じているという現象に注目している。具体的に、犯罪、非行、逸脱行為の法的な定義、一般大衆の犯罪や非行、逸脱に対する認識と態度、そして実際の青少年の逸脱行動の状況、影響要素を調査・比較することで、実際の発生率と公衆の印象との間に存在するギャップの原因を探求している。このギャップを理解することで、社会の認識のズレを明らかにし、青少年の問題に対するより効果的なアプローチを模索することを期待している。

## 2. 今年度の研究報告

\*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的 ②研究の方法 ③研究成果・今後の展望

### ①研究の目的

一般大衆における犯罪、非行、マナー違反などの行為に対する認識と、青少年の逸脱行為の実際の状況及び逸脱行為に影響を与える要因を探究することを目的としている。

令和4年版犯罪白書によると、平成16年以降、少年による刑法犯の検挙数は年々減少しており、不良行為により補導される少年の数も減少傾向にある。一方で、内閣府が2015年に行った「少年非行に関する世論調査」では、少年非行が増加していると感じる人の割合が78.6%に上ることが示されている。これらの事実、少年の非行や逸脱行動の実際の発生率と、それに対する一般大衆の認識の間に顕著なギャップが存在することを示唆している。

今年度は、この認識のギャップがなぜ発生するのか、その要因を明らかにすることを目的としている。具体的には、一般大衆が犯罪や非行、逸脱行為に対して持つ認識や態度、認識と態度に影響する要因、青少年の逸脱行為の実態、およびこれらの行為に影響を与える要因を分析し、社会的認識と実態の間に存在するギャップの原因を解明することを目指す。

### ②研究の方法

①犯罪・少年非行・逸脱の定義や三者間の区別を明確にし、法律に関連する文献や先行研究などに対して資料分析を行う。②一般人が認識する犯罪・少年非行・逸脱の定義や三者間の区別、特に法律との差を明らかにするために、大学生を対象にインタビューを実施し、質的分析を行う。③インタビューの結果から逸脱と思われる行為を抽出し、WEB リサーチ会社を利用して、様々な青少年の逸脱行為（法律定義と一般人定義両方とも取り入れる）を提示し、一般の人々がそれぞれの行為に対する評価、感情、及び逸脱行為の形成経路についての考えを調査する。④犯罪・逸脱の実態及び背景である幼少期経験についてアンケート調査を行う。以上の結果を比較し、一般人の考えと犯罪・逸脱の実態の間にギャップが存在する原因について検討する。

## 今年度の研究報告（つづき）

### ③研究成果・今後の展望

#### ・研究成果

フォーカスグループインタビュー：

一般人が日常生活の中で感じる「犯罪、非行、マナー違反に関する感覚」及び犯罪のグレーゾーンに対する認知について解明するため、女子大学生9人を対象者として、2つのグループに分けて（第一回5人、第二回4人）、犯罪、非行、マナー違反に対する認識や態度についてフォーカスグループインタビューを行った。具体的に、

- ①犯罪、非行、マナー違反について思い浮かべる行為
- ②犯罪、非行、マナー違反に関する情報の入手方法
- ③昔と比べて犯罪の増減に対する見解
- ④増加した犯罪例、減少した犯罪例
- ⑤日常生活の中の出来事について、犯罪で判断すべきかどうかについての考え
- ⑥グレーゾーンに対する感覚

などに焦点を当てたディスカッションを行い、被インタビュー者の同意の上で録音および録画で記録した。

取得したデータを逐語録に作成し、内容に対して分類、カテゴリー化などの質的分析を行い、

①一般大衆の犯罪、非行、マナー違反などのよくない行為に対する定義、②その中の青少年逸脱行為の位置づけ、③逸脱行為尺度表を作成するための行為抽出や、④一般大衆の逸脱行為に関する認識に影響する要素に関する仮説を立てることを試みた。

#### ・今後の展望

現在の進捗として、

①犯罪・少年非行・逸脱に関する法律面の定義を明確にし、

②大学生に対するフォーカスグループインタビューを2回、さらに個人インタビューを2回行い、結果について解析を行った。

今後の予定として、フォーカスグループインタビューの結果を踏まえて、質問項目をさらに明確化、精緻化して、一般大衆を対象とした個人インタビューを実施し、犯罪行為に対する認識やその区別の根拠についての理解を深める。そして、その結果を参考として犯罪・逸脱行為についてのアンケートを作成し、一般大学生と犯罪歴者の犯罪・逸脱歴および犯罪・逸脱の影響要素を調べる。さらに、一般人の犯罪に対する認識と、実際の犯罪者の行動や犯罪行為に影響を与える要因を比較し、犯罪率が低いにもかかわらず一般人の犯罪に対する不安が依然として高い理由を探求する。

### 3. 成果発表（投稿中も含む）

\*研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

① なし

②・楊夢、岡本吉生 「未成年者の「してはいけない行為」に対する社会的認知について」日本犯罪心理学会第61回大会、2023年9月23日、お茶の水女子大学

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

楊 夢

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年3月1日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	タカハシ ミキ	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学研究科 人間発達学専攻 博士課程後期1年次
氏 名	高橋 美樹		
指導教員氏名	太田 正人	指導教員 所属・職名	人間生活学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	天然低分子化合物Honokiolによるヒト赤白血病細胞の細胞死誘導機構の解析		

## 1. 研究成果の概要

\*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。（様式改変・追加不可。以下同様）

今年度は急性前骨髄球性白血病（APL）細胞株を対象に、HonokiolやAll-transレチノイン酸（ATRA）の作用効果やその詳細な機構について検討を進めた。今年度の実験・解析により、APL細胞株であるHL-60細胞においてATRAが増殖抑制効果を示し、Honokiolが細胞死を惹起することが明らかになったほか、これらの効果についてレチノイン酸受容体が関与している可能性が示唆された。また、本研究成果の一部は第46回日本分子生物学会年会にて報告した。

## 2. 今年度の研究報告

\*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的      ②研究の方法      ③研究成果・今後の展望

### ①研究の目的

急性赤白血病（AEL）は急性骨髄性白血病（AML）の一つであり、AMLにおける頻度は1.5%と稀な疾患である。AELに焦点を当てた研究はとて少なく、AELを特徴づける遺伝子異常や分子病態について、その全容は明らかになっていない。また、AELはAMLと比較して進行が速く、利用可能な治療法に対する予後も不良であるといった特徴を有する。ガイドラインによると、AMLにおける基本的な治療戦略は治癒を目指した強力な化学療法であり、多剤併用療法が基本とされているが、侵襲性の高い化学療法は、特に高齢者においては適応できない場合も多いことから、患者負担の少ない新規治療法や薬剤の開発が求められている。

一方で、AELと同様に、AMLの一つである急性前骨髄球性白血病（APL）の治療にはAll-transレチノイン酸（ATRA）を用いた分化誘導療法が用いられ、ATRAと化学療法の併用により治療成績が飛躍的に向上している。本研究では、モクレン科の厚朴から得られるポリフェノールの一種で、多様な生理活性を持つことが知られる天然低分子化合物Honokiolに注目した。Honokiolは比較的低毒性でありながら、AMLを含む多くの悪性腫瘍に対して強力な抗がん作用を示すことや、レチノイドX受容体（RXR）を選択的に活性化することが報告されており、HonokiolがATRAと同様の機構での作用効果が期待されるものの、未だ不明の部分が多い。このような背景から、白血病細胞に対するHonokiolの抗がん作用・抗腫瘍効果を明らかにすることを目的とした。

### ②研究の方法

本研究は、JCRB細胞バンクより、ヒト赤白血病（AEL）細胞であるHEL細胞（JCRB0062）と、ヒト前骨髄球性白血病細胞（APL）細胞であるHL-60細胞（JCRB0085）を分譲して頂き、これらの培養細胞を用いて実験を行った。これらの細胞を均一な細胞密度で播種し、HonokiolやAll-transレチノイン酸（ATRA）を2日毎に添加して培養しつつ、生細胞数/死細胞数をトリパンブルー染色により計数して細胞増殖曲線および細胞生存曲線を作成することで、細胞の増殖や細胞死の経時的变化を観察した。さらに、Cell titer Gloアッセイを用いた培養細胞の代謝活性の定量などにより、HonokiolやATRAが白血病細胞にもたらす影響を検討した。

## 今年度の研究報告（つづき）

### ③研究成果・今後の展望

#### 【研究成果】

赤白血病（AEL）細胞のHEL細胞をHonokiolで処理し、死細胞では細胞膜の透過性が増加することを利用して、細胞質タンパク質を青く染色することで死細胞を検出するトリパンブルー染色法により観察したところ、溶媒処理群と比較して、Honokiol処理群では青染された細胞が多く観察された。また、これらの細胞をDAPI染色によって核の形態を観察したところ、溶媒処理群では大きさの異なる卵円形の核が観察された一方で、Honokiol処理群では、核が断片化されたアポトーシス小体が観察された。今回の実験条件では、HEL細胞に対して、HonokiolがApoptosis経路依存性及びNecroptosis経路非依存性に細胞死を引き起こす可能性が示唆された。さらに、急性前骨髄球性白血病（APL）細胞のHL-60細胞に対して、HonokiolはAll-transレチノイン酸（ATRA）よりも強く生細胞活性を抑制した。今回の実験結果から、HL-60細胞においてATRAが増殖抑制効果を示し、Honokiolが細胞死を惹起することが明らかになったほか、これらの効果についてレチノイン酸受容体が関与している可能性が示唆された。

#### 【今後の展望】

今年度に引き続き、下記のような実験・解析を進め、さらに研究を発展させていく計画である。

- ・HEL細胞、HL-60細胞を同条件で培養・処理した場合の比較
- ・HonokiolとAll-transレチノイン酸を同時処理した場合の検討
- ・K562細胞など、HEL細胞、HL-60細胞以外のヒト白血病細胞株を用いた検討
- ・細胞死関連遺伝子の発現解析、リアルタイムPCRを用いた発現遺伝子の定量、シーケンス解析
- ・各特異抗体を用いた免疫染色およびウエスタンブロットティングによるカスパーゼの活性化検出
- ・フローサイトメーターや蛍光顕微鏡、透過型顕微鏡を用いた観察・評価

細胞死の種類としてはアポトーシスやネクロトーシスの2つが主に知られているが、近年新しい細胞死の概念として、ネクロトーシスの一種であるネクロプトトーシス、フェロトーシス、パイロトーシスなどの存在が発見されつつある。これらの多様な細胞死のシグナル伝達経路を明らかにし、細胞死を制御できれば、様々な疾患の治療に役立つことが期待できる。また、本研究の研究成果は、今後、学会で報告するほか、投稿論文にまとめる予定である。

### 3. 成果発表（投稿中も含む）

\* 研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

① なし

② 高橋美樹、太田正人「天然低分子化合物HonokiolによるHL60前骨髄球性白血病細胞に対する抗腫瘍効果について」（第46回日本分子生物学会年会、2023年12月7日、神戸）

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

高橋 美樹

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3月 6日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	ヨコオ ユミ	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学研究科 生活環境学専攻 博士課程後期 3年次
氏 名	横尾 優美		
指導教員氏名	横井 孝志	指導教員 所属・職名	人間生活学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	3Dバーチャルボディのための3D形状データ補正システムの提案		

## 1. 研究成果の概要

\*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式改変・追加不可。以下同様)

消費者個人の3Dバーチャルボディの作成精度向上を目的に、異なる2条件で取得した腕付根部の3D形状計測データを用いて、自然立位姿勢(外転0°)時の腕付根囲形状を定量的に捉える方法を検討した。腋窩は衣服設計上重要な部位であるが、3D形状計測では影となり欠損が生じやすく計測精度が低い部位である。本研究では、ハンディスキャナを用いた3D形状計測法と、従来の包帯石膏法で腕付根囲形状を取得し比較した。その結果ハンディスキャナ法の方が、外部圧力の影響を受けずに、腕付根部の腋窩部の脂肪層や皮膚形状を得られたため、後は外転姿勢時の腕付根囲形状から自然立位姿勢時の腋窩部を補完する方法を検討する。

## 2. 今年度の研究報告

\*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

- ①研究の目的      ②研究の方法      ③研究成果・今後の展望

### ① 研究の目的

近年、消費者個人の3Dバーチャルボディを作成し、仮想空間内での衣服設計やフィッティングに活用するための研究が進められている。3D形状計測によって取得した個人の3D人体形状データから、仮想空間内に3Dバーチャルボディを作成するシステムは既存であるが、腋窩を中心とした腕付根部の再現精度に課題がある。腋窩部は、上肢の外転角度が0°の場合、体幹部と接触する部位であるため、上肢を自然に下垂した姿勢(以降「自然立位姿勢」とする)や、前挙した姿勢での3D形状計測時には正確に捉えることが難しい。しかし腋窩を含む腕付根部は、衣服のフィット性に関わる重要な部位であるため、より正確な形状を定量的に捉え、衣服設計や3Dバーチャルボディへの生成に活用していくことが求められる。

したがって、本研究は異なる2条件で取得した腕付根部の3D形状計測データを用い、自然立位姿勢時の腕付根囲形状を定量的に捉える方法を検討した。

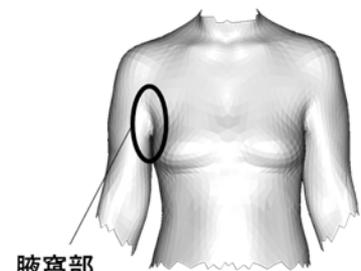


図1 腋窩部の位置

### ② 研究の方法

18歳～23歳の女性15名を対象に、条件①包帯石膏法(自然立位姿勢)と条件②ハンディスキャナを用いた3D形状計測法(自然立位姿勢、外転45°姿勢)で、右腕付根囲形状を計測した。計測時には図2のように、被験者の前後腕付根点、肩先点、胸幅点、背幅点の計5点にランドマークを貼付した。条件①包帯石膏法では、採取した石膏を固定式スキャナで読み取り、石膏の3D形状データを計測した。そして3D石膏データの腕付根形状に沿って打点し、腕付根囲の座標値を取得した。条件②ハンディスキャナ法においても、同様の処理で3D人体形状から腕付根囲の座標値を取得した。

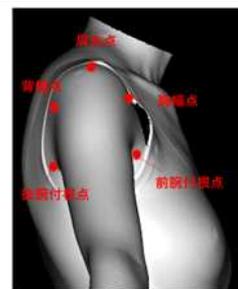


図2 腕付根部ランドマーク位置

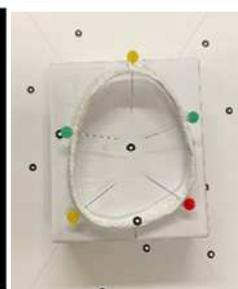


図3 包帯石膏の腕付根形状採取例

## 今年度の研究報告（つづき）

### ③ 研究成果・今後の展望

#### 【研究成果】

##### (1) 腕付根囲形状の比較

条件①、条件②自然立位姿勢（N姿勢）、条件②上肢外転45° 姿勢（ab45姿勢）のx,y,z座標値データ各15名分を平均し、各条件での腕付根囲平均形状を作成した結果を図4に示す。条件②N姿勢では前後の腋窩点近くで膨らみが生じ、腕付根囲幅が広がる傾向が見られる。これは上肢と体幹の接触に伴って腋窩周辺の筋肉および脂肪層が押しつぶされたためと考えられる。条件①と条件②ab45姿勢では、腋窩部を除く前腋窩点から後腋窩点までが近い形状を示した。条件①で条件②N姿勢のような腋窩点付近のふくらみが見られなかったのは、石膏包帯を巻いた外的圧力が影響し、柔らかな脂肪層を中心に形状が変化した可能性がある。条件②ab45姿勢では、上肢と体幹部間に空間があるため、腋窩部も3D形状計測が可能である。条件②ab45姿勢の腋窩部が条件①と比較して、下方にやや突出した形状を示したことも、腋窩部の脂肪層や皮膚形状を外部圧力無しに捉えられたことが要因である。

##### (2) 腕付根囲最大幅の比較

腕の外転に伴う腕付根囲最大幅の変化を捉えるため、条件②のN姿勢とab45姿勢における腕付根囲幅を比較した。各被験者のN姿勢条件とab45姿勢条件の座標値データから、X座標値の最大値と最小値を求めた。X最大値は、腕付根囲の前部で最も突出した点であり、X最小値は後部で最も突出した点である。N姿勢とab45姿勢のX座標値の差を求めたグラフが図5である。Ab45姿勢と比較し、N姿勢時の方が腕付根囲幅は増大し、前部より後部の方が幅の増加量が多い傾向が見られた。

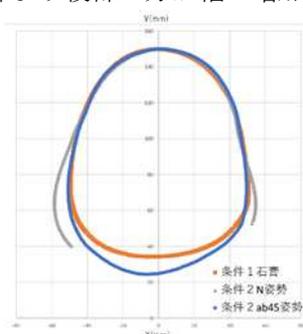


図4 各条件における座標値平均の散布図

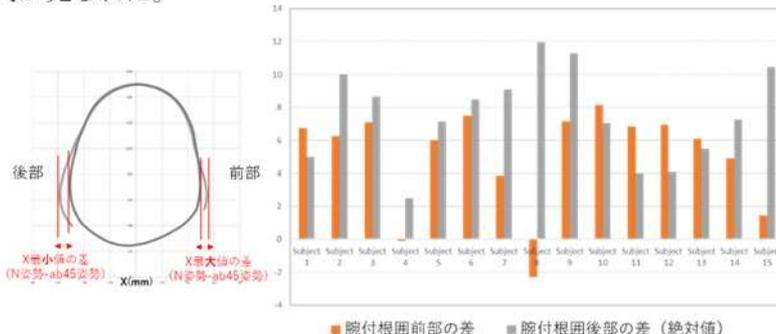


図5 腕付根囲前部、後部における2姿勢間の幅の差

#### 【今後の展望】

包帯石膏法と比較しハンディスキャナ法の方が、外部圧力の影響を受けない腕付根囲形状を得られたが、自然立位姿勢時には腋窩部を直接計測することは困難である。今後は外転姿勢時の腕付根囲形状から自然立位姿勢時の腋窩部を補完する方法を検討し、自然立位姿勢時の腕付根形状として妥当であるか検証する。

### 3. 成果発表（投稿中も含む）

\* 研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

- ①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
- ②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

① 横尾優美・武本歩未・大塚美智子，三次元形状データを用いた三次元立位姿勢からの自然立位上半身形状推定方法の提案，繊維製品消費科学，(掲載予定)

② 横尾優美，三次元形状計測による自然立位姿勢腕付根囲形状の定量化（口頭発表），日本繊維製品消費科学会2023年度大会，2023年6月24日 オンライン開催

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

横尾 優美

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3月 11日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	アベ イサコ	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学研究科 生活環境学専攻 博士課程後期 2年次
氏 名	阿部 一咲子		
指導教員氏名	平田 京子	指導教員 所属・職名	人間生活学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	首都直下地震からの復興における被災者の住宅再建への支援に関する研究		

## 1. 研究成果の概要

\*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式改変・追加不可。以下同様)

既往災害における復興目標での住宅再建を含む生活再建の位置づけに関して文献より考察し、度重なる被災を経て生活再建を重視する視点が強まり、熊本地震以降は復興目標として独立したと明らかにした。また熊本地震において被災者に住宅再建支援を行った組織・団体、計4件に相談件数や支援内容、その問題点など質と量の側面からヒアリング調査を行った。結果、支援方法及び内容の双方向性に着目して住宅再建支援を類型化し3タイプに分類できた。また被災者の相談支援に対するニーズから再建・修繕に対する意思決定段階が3段階に分かれると明らかになり、住宅再建・修繕が進むにつれ支援方法も多層的に変化したことが分かった。

## 2. 今年度の研究報告

\*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的      ②研究の方法      ③研究成果・今後の展望

### ①研究の目的

住宅は被災者の日常生活の基盤であるため、迅速かつ慎重な再建が求められる。しかし既往研究では早期再建を過度に重視する、住宅再建に際して意思決定に迷うなどの問題から被災者自身のニーズに合致しない再建がなされ、住宅性能などに関して後悔する様子がみられた。再建住宅は今後の社会においてストックとなるため、被災という緊急性が要求される特殊な状況下でもより良質な住宅再建が望まれる。

この実現のためには住宅再建を被災者の自己責任にしておくのではなく、よりよい形へ導く支援を行うことが重要である。被災者生活再建支援法に基づく支援金の給付など金銭的支援や災害公営住宅の建設などの物的支援を行うだけでなく、被災者が求める支援情報の提示や被災住宅の被害調査・再建相談などにより専門的知識を提供する人的支援を行う必要がある。これにより早期再建への過度な重視や住宅に対する専門知識不足の問題を解消し、慎重な自宅再建を早期に実現する一助とすることができると考えた。

本研究では大規模災害である首都直下地震を想定し、復興時に大量の被災者が適切な住居選択を行う支援策を明らかにすることを目的に、既往災害での支援の調査を通し効果的な支援の構成要素、想定されている首都直下地震の支援策に不足している支援項目等を明らかにする。

### ②研究の方法

実際の被災者に対する住宅再建に関してどのような支援が行われたか、被災自治体の災害記録誌や支援を行った組織・団体にて公開されている資料を調査した。住宅再建支援については相談内容・件数・対応の詳細など公表されている情報が多くないため、被災者に対して住宅再建支援を行った組織・団体に支援内容の詳細を聞くヒアリング調査を引き続き行った。今年度は熊本地震で対応した、熊本県建築士会にヒアリングを行った。また熊本地震での相談支援の実態と比較を行うため、首都直下地震に対して現在計画されている住宅再建支援について調査を行った。

## 今年度の研究報告（つづき）

### ③研究成果・今後の展望

首都直下地震からの復興における被災者の住宅再建へのよりよい支援を明らかにするために、実際に行われた住宅修繕・再建に対する人的支援の内容を把握しその役割を明らかにした。前年度に引き続き熊本地震を一例に支援を行った組織・団体にヒアリング調査を行った。

これまでの計5組織に対するヒアリング結果から、実際に行われた支援内容を既往災害の知見を基に想定された支援として内閣府による「被災者の住まいに関する相談・情報提供マニュアル」（以下、情報提供マニュアル）を対象に、相談の目的性に着目し相談支援を段階的に分類した。このマニュアルは災害時に被災者の住まいの確保に関する情報提供に従事する可能性がある自治体職員や関係機関の担当者に向け、想定される相談や情報提供の方法、相談対応の留意点を整理したものである。結果、「一般相談」、「現地調査に基づく相談」、「パッケージでの情報提供・相談」、「住宅再建を目的とした相談」の4段階となった。熊本地震での支援内容と、内閣府による「情報提供マニュアル」で想定されている相談支援の内容を比較した。結果、「一般相談」はヒアリング結果及び「情報提供マニュアル」で言及されていたが、「一般相談」の一部である被災住宅の安全性に対する緊急的な判断や「現地調査に基づく相談」は「情報提供マニュアル」では該当する支援はみられず、内閣府では想定されていなかったと分かる。中でも「現地調査に基づく相談」は専門的な組織へ相談事項の引き継ぎを行うとされ、外部委託に集約していた。また「住宅再建を目的とした相談」は内閣府では想定されていたが、ヒアリング結果からは該当する支援は聞かれなかった。内閣府が自治体及び関係機関が実施すると想定していた相談支援と実際の支援内容には乖離があり、熊本地震ではパッケージでの情報提供・相談までを実施していた。この可能性の一つとして「住宅再建を目的とした相談」である、被災者の意思決定に関わり条件の整理などを通じて意思決定をサポートする支援は、工務店や住宅メーカーなどの施工業者がその役割を担っていたことが考えられる。

また相談支援を実施した組織同士での協力体制に着目した結果、相談支援体制の構築における迅速化・効率化を図るための「平常時からの関係性・相談業務の転用」、「職能による相談支援の分業化」、「被災地外の専門家・人員の活用」、「段階的な増員」、という方策が掛け合わせり成立していることが分かった。今後発生する災害でも、この4つの方策の実施が相談支援の迅速化・効率化を図る鍵になると考えられる。

以上の研究成果をまとめ、日本建築学会大会および同学会関東支部大会にて口頭発表を行い、日本女子大学大学院紀要に掲載された。また日本建築学会計画系論文集の審査に通過し掲載予定である。

被災後の社会において住宅再建を通じて、持続可能で良質な住宅ストックを形成することは重要性をもつ。今後の展望として発生が懸念される首都直下地震では住宅再建件数が大幅に増加し、相談支援への需要も桁違いに高まると予測される。首都直下地震に対する住宅再建支援の充実化に向けて良質な住宅ストックを残すための相談支援に関して現時点で想定される対応を、今後検討したい。またその際に2024年に発生した能登半島地震での相談支援の現状を把握し熊本地震との比較・考察することを予定している。

### 3. 成果発表（投稿中も含む）

\* 研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

① 阿部一咲子, 平田京子, 石川孝重: 熊本地震における相談支援の段階と支援体制の方策 - 熊本地震に対応した5組織を対象として -, 日本女子大学大学院紀要, 家政学研究科・人間生活学研究科, 30号, 2024年3月, pp.1-10, .  
阿部一咲子, 平田京子, 石川孝重: 地震災害後の住宅再建過程における相談支援の実態とその特徴 - 熊本地震における相談支援を対象として -, 日本建築学会計画系論文集, 第89巻, 第819号, ページ数未定, 2024年5月. (掲載予定)

② 阿部一咲子, 平田京子, 石川孝重: 熊本地震を事例とした相談支援に対する意思決定段階ごとのニーズ変化 - 市民の防災力向上に向けて その97 -, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (近畿) (都市計画), 7490, pp.1069~1070, 2023年9月.

阿部一咲子, 平田京子, 石川孝重: 熊本地震における相談支援の実態と支援体制の方策, 2023年度日本建築学会関東支部研究報告集, 7004, pp.295-298, 2024年3月.

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

阿部 一咲子

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3 月 15 日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	ミョウ シーエン	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学研究科 人間発達学専攻 博士課程後期 1年次
氏 名	Miao Shi En		
指導教員氏名	川端 有子	指導教員 所属・職名	人間生活学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	メタフィクション絵本の翻訳		

## 1. 研究成果の概要

\*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。（様式変更・追加不可。以下同様）

本年度は私の博士課程研究の初年度に当たる。この期間は、まず研究テーマの選定から始まった。博士論文の規模を適切に把握するために、より基礎的な研究が必要であることが明らかとなった。そして、私の研究テーマの基本的な問題に焦点を当てることを試みた。“メタフィクション絵本”という用語には、厳密な定義が欠如している。したがって、本年度は大人文学および児童文学におけるメタフィクションの定義と、絵本におけるメタフィクションに関する限られた文献を総合し、私の研究に適した定義を形成し、基礎的な研究を実施する必要がある。

この一年間は論文執筆に必要な資料の収集にも時間を費やした。特に、メタフィクション絵本というジャンルにおける厳密な定義がない場合、「メタフィクション絵本」の包括的なリストは未だ存在しない。従って、私は一次資料を詳細に調査し、それらが私が構築したメタフィクション絵本の定義に適合するかどうかを慎重に判断する必要がある。

## 2. 今年度の研究報告

\*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的      ②研究の方法      ③研究成果・今後の展望

### ① 研究の目的

本研究の目的は、英語と日本語の文化的な相違が翻訳に及ぼす影響を探求し、異なる時代に刊行されたメタフィクション絵本の翻訳に関する、文化、言語、視覚的リテラシーの観点からの選択的な事例研究を展開することにある。すべての翻訳は、原文に一定の加工を施すものであり、特に若い読者向けに執筆された作品の翻訳は、大人と子どもの間の影響の不均衡から、より広範な改変の影響を受けやすいと考えられる。本研究の主要な目的は、メタフィクション絵本の翻訳において、意味の範囲がどのように制限され、拡張され、変容するかを分析し、それが若い読者のテキスト理解に及ぼす影響を明らかにすることである。また、異なる時代の作品を対象に分析することで、翻訳プロセスがどのように変化しているかを追跡する。

本研究では、メタフィクション絵本を取り上げた。そして、これらの絵本を英語から日本語に翻訳する際に、翻訳者が採用する規範、手法、アプローチに焦点を当て、その翻訳プロセスを詳細に調査した。また、翻訳者のプロセスに着目することで、プロセス指向の翻訳研究に基づいて研究を遂行した。

### ② 研究の方法

この研究は、児童文学と翻訳研究の理論を融合し、学際的手法を適用することにより、従来無視されてきたポストモダン絵本やメタフィクション絵本の日本語翻訳に関する学術的洞察を提供することを目的とする。具体的には、「翻訳」と「翻訳プロセス」を、作者、翻訳者、編集者、出版社を含む包括的な概念として理解する。この文脈において、メタフィクション絵本を日本語に翻訳する際に編集者と翻訳者が経験する文化的意思決定プロセスと、その過程で生じる課題、特に幼児向けの翻訳がもたらす影響に焦点を当てる。本論文では、翻訳されたテキストの内容と子どもたちの反応の差異を明らかにし、名前の翻訳、言葉遊びの損失、日本語訳における絵と文の不一致などの要因について掘り下げる。

## 今年度の研究報告（つづき）

### ③ 研究成果・今後の展望

今年からは、私の研究の礎を築くためのモデル構築を検討している。私の研究テーマに関する基礎的研究は数多く行われているが、それらを統合する構造は未だに明確ではない。現在、成人文学と児童文学の文脈においてはそれに関する定義が存在しているが、絵本や翻訳におけるメタフィクションに関する文献は依然として限られている。そのため、これらの文脈を考慮に入れながら、論文で用いるメタフィクションの定義をより体系的に整理する必要がある。Lissi Athanasiou-Krikelisによって提唱されたメタフィクション絵本の理論的背景を基に、翻訳の視点から絵本を分析するための機能的な構造を構築することを目指している。目標は、まず、メタフィクションの概要を提供することで、これには、明確に定義されたテキストのサブジャンルを重複せずに示し、さらなる研究に有用な情報を提供する。個々の書籍およびその翻訳に関するケーススタディには取り組んでいるが、これらを包括的な論文としてまとめるには機能的な構築が必要不可欠である。したがって、次段階としては、論文の構造に焦点を合わせる必要がある。

さらに、今年行った基礎研究については、発表および論文の文献レビューの両方を兼ね備えた形で報告する予定である。今年の私の再検討では、明確かつ簡潔な思考プロセスを欠いたままであったため、本年度は、これらを整理し、発表に適した形に整えることを目指している。学会で発表を行いたい個々のケーススタディー発表は、前述の理論的枠組みに従って、テーマや類型、時代に基づいて分類および整理することができる。また、各ケーススタディーを論理的に結びつけるための架け橋として、章やセクションを適切に配置することが重要である。これにより、論文全体が統一された主題に沿って展開し、より明確な論理構造を提供することが可能となる。

### 3. 成果発表（投稿中も含む）

\*研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

- ①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
- ②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

#### ① 雑誌論文

Alice Miao 「Translation of Ambiguous Humour from Japanese to English」 Transnational Turns in Children's Literature : International Research in Children's Literature 18.3 (2025) \*（投稿中）

#### ② 学会発表

シーエン（アリス）ミョウ 2024年5月25日 英語圏児童文学学会

東日本支部 春の例会 研究発表要旨「はろるどの冒険と翻訳: 自由意志の存在とメタフィクション性の探求」

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

ミョウ シーエン

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年3月11日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	コニシ ユウコ	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学研究科 生活環境学専攻 博士課程後期 1年次
氏 名	小西 優子		
指導教員氏名	藤井 恵子	指導教員 所属・職名	人間生活学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	大量調理操作の省エネルギー化に関する研究		

## 1. 研究成果の概要

\*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。(様式改変・追加不可。以下同様)

本研究では、大量調理時のエネルギー消費量を削減する調理操作について検討した。炊飯は、スチームコンベクションオーブン(スチコン：電気式)と比較して、ガス炊飯器の方がエネルギー消費量は小さかった。スチコンは沸騰までに要した時間が長かったが、飯の硬さや色調においては、差が認められなかった。ブロッコリーの茹で操作は、ガス調理(回転釜、コンロ)と比較して、予熱時間の短いスチコンの方がエネルギー消費量は小さかった。さらに、蒸気を利用した加熱であることから、ビタミンやミネラルの等の栄養成分の損失も少なかった。以上の結果から、調理操作の違いによって、エネルギー消費量や栄養成分量が異なることが明らかとなり、特に茹で操作においては、スチコンの利用が有効であることが示唆された。

## 2. 今年度の研究報告

\*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的 ②研究の方法 ③研究成果・今後の展望

### ① 研究の目的

本研究の目的は、持続可能な地球環境を目指して省エネルギーを実現するための大量調理操作の確立である。近年、地球温暖化に対する取り組みが世界規模で行われ、その主な原因である二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)排出量をいかに削減するかが課題である。日本においても、CO<sub>2</sub>排出量の削減に向けて、日常生活で取り組めるような削減方法が提案されている。家庭調理におけるCO<sub>2</sub>排出量削減に関する研究は、エコ・クッキングの効果に関する報告や調理操作に着目した省エネルギーに関する報告など様々な手法が提案されている。一方、給食施設は、大量の食材料を大型の調理機器で取り扱う大量調理を行う。家庭調理と比較して火力も大きく、多くのエネルギーを消費し、環境への負荷も大きいことから、CO<sub>2</sub>を削減するためには、家庭調理だけではなく、大量調理における削減法の提案も重要である。大量調理におけるCO<sub>2</sub>排出量削減に関する研究は、大量調理機器のエネルギー消費量の実態調査や省エネ教育の効果などの報告があるが、給食施設で実践できるような削減法に関する報告は少なく、削減につながるような調理操作について提案することが課題である。また、大量調理は、調理過程や加熱速度などにおいて、家庭の調理とは異なる現象が生じることから栄養成分、物性、色調などに影響を与えることが予測される。そこで、本研究では、省エネルギー化だけでなく、大量調理の過程で生じる栄養成分や物性、色調の変化を明らかにし、栄養面や嗜好性に配慮した環境にやさしい操作方法について総合的に検討する。

### ② 研究の方法

本研究では、大量調理時のエネルギー消費量を削減する調理操作について検討するために、提供頻度の高い炊飯と茹で操作について100食規模のモデル実験を行った。

炊飯は、精白米9.9kgを洗米機で洗浄、浸漬後に炊飯した。加水量は、ガス炊飯器1.3倍、スチコンは1.4倍とした。スチコンの加熱条件はコンビモード150℃、湿度100%で30分に設定、加熱後10分間蒸らした。

茹で操作は、ブロッコリー2.2kgをガス回転釜、ガスコンロ、スチコンでそれぞれ加熱し、ブラストチラーで冷却した。ガス回転釜・ガスコンロは試料投入量が10%となるように水を計量し、沸騰してから試料を投入、5分間加熱した。スチコンの加熱条件はスチームモード99℃、10分に設定した。

測定項目は、第1次エネルギー消費量(MJ)、テクスチャー特性(硬さ・付着性・凝集性)、色度(明度(L\*)、赤度(a\*)、黄度(b\*))、栄養成分は、ビタミンB<sub>1</sub>・C、ミネラル(Ca・Mg・Fe・Na・K・Mn)とした。

## 今年度の研究報告（つづき）

### ③ 研究成果・今後の展望

#### <研究成果>

家庭や給食施設を含む事業所などから排出されるCO<sub>2</sub>の割合は高く、削減につながるような調理行動、調理操作を実践することが重要である。これまで、家庭調理におけるCO<sub>2</sub>排出量や省エネルギー調理に関する報告がなされている。一方で、大量調理においては、給食経営管理実習における電気やガス消費量の実態調査や省エネルギー教育の有効性について報告がなされているが、CO<sub>2</sub>を削減できる具体的な方法やその効果に関する報告は少ない。さらに、栄養成分量の変化や物性、色調にも着目したエネルギー削減法に関する報告はないことから、検討する意義は大きい。

本研究では、大量調理時のエネルギー消費量を削減する調理操作について、炊飯と茹で操作のモデル実験を行い、栄養成分量や物性変化について検討した。

#### 1.炊飯

大量調理で使用頻度の高いガス炊飯器とスチコンを用いて炊飯し、比較・検討した。ガス自動炊飯器と比較して、スチコンは沸騰までに要した時間が長く、エネルギー消費量は大きかった。先行研究で沸騰に至るまでの加熱速度が炊き上がった飯の品質に影響を与えることが報告されているが、炊飯後の重量は、加水量に応じて差が見られたものの、飯の物性や色調の差は見られず、品質に影響はなかった。大量調理の効率化を図るために、スチコンによる炊飯が期待されているが、エネルギー消費量削減という観点からは、ガス自動炊飯器の方が有効であることが示唆された。

#### 2.茹で操作

ブロッコリーをガス回転釜（以下回転釜）、ガスコンロ（以下コンロ）、スチコンを用いて調理を行い、比較・検討した。回転釜・コンロと比較して、スチコンの方が予熱時間を含めた調理時間が短く、エネルギー消費量は小さかった。ブロッコリーの硬さは、回転釜・コンロと比較して、スチコンの方が軟らかかった。花蕾の明度は、回転釜が最も高く、赤度（a\*値）は最も低かったが、スチコンで調理したブロッコリーの赤度は最も高く、退色が見られた。回転釜・コンロは加熱時間が5分であったのに対して、スチコンは10分と加熱時間の長いことが影響したと考えられる。ビタミンB<sub>1</sub>・Cはスチコン調理と比べ、回転釜・ガスコンロの方が残存量は少なかった。鉄やマグネシウム、カリウムは、スチコン調理で残存量が多い傾向が見られたが、他のミネラルについては差が認められなかった。大量調理施設では、野菜の加熱を効率良く行うためにスチコンが利用されている。茹で調理にスチコンを代用することは、エネルギー消費量の削減や栄養成分の損失を少なくする上で有効であることが示された。ただし、スチコンの加熱時間については、最適化を図る必要がある。

大量調理施設の設置機器の種類や数、熱源は様々である。以上の結果から、スチコンを利用することによって、エネルギー消費量が増加する場合も考えられることから、施設の状況や料理に応じた調理機器や熱源を選択し、省エネルギー化を図る必要がある。

#### <今後の展望>

炊飯と茹で操作以外の料理についても検討を重ね、実践的なエネルギー消費量の削減法を明らかにしていく予定である。さらに、大量調理における栄養成分の変化及び物性変化についても研究をしていく予定である。

### 3. 成果発表（投稿中も含む）

\*研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

① なし

② 小西 優子、調理機器や熱源の違いがエネルギー消費量に与える影響、第18回日本給食経営管理学会学術総会、2023年11月11日～12日、大妻女子大学

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

小西 優子

# 日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 2月 26日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	セキムラケイタ	在籍研究科 専攻・学年	人間生活学 研究科 生活環境学 専 攻 博士課程後期1年次
氏 名	関 村 啓 太		
指導教員氏名	薬 袋 奈 美 子	指導教員 所属・職名	人間生活学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	佐藤功一による旧制日本女子大学キャンパス計画案の特質とその意義		

## 1. 研究成果の概要

\*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。（様式改変・追加不可。以下同様）

本研究にあたって、既往研究の整理を行い、佐藤功一のテキストと作品を分析する手法を用いて研究の意義を明確にする作業をおこなった。もっとも重要と考えられる鳥観図および平面図の検討においては、泉山キャンパス以外にも統一的な建築計画の痕跡が見受けられた。また、1929年に部分形に施工されようとした部分については、各所にコモンというべき「研究と交流の場」が意図して設計された箇所があると結論付けた。都市的な視点からは、佐藤功一の論考である「都市美論」（1925年1月）の分析を通じて、佐藤功一がキャンパス内の統一性や都市に対する視点を重視した設計手法がみられることが予想される。

## 2. 今年度の研究報告

\*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的      ②研究の方法      ③研究成果・今後の展望

### ① 研究の目的

佐藤功一は大正から昭和初期にかけて多くの建築物を設計し、建築教育あるいは住教育において大きな影響を残した人物であるとされる一方、現在では設計した建築作品の残存数が少なく、その設計手法には不明な点が残されている。本学キャンパス計画案は、実現はしなかったものの、大学キャンパスの再開発計画案であり、関東大震災からの復興計画案である。また、建築群をゼロから検討している点で佐藤功一の建築思想および設計手法の断片が読み取れるものである。特に、本計画案は、一部の本学関係者のみに知られるところで、これまで建築学の視点から十分に分析されておらず、それを学術的に位置づけることに新規性がある。これによって、佐藤功一の建築設計手法、関東大震災の復興期における学校施設、高等教育機関のあり方についての知見を得られることができる。

### ② 研究の方法

- 1) 建築計画からの分析：本学キャンパス案について、国立公文書館所蔵の大学設置申請図面等を用いて建築計画学的な視点から史料の分析を建築計画的な側面から行った。具体的には、キャンパスの配置、内部の主要室の平面プランなどの収容人数や使用法を推定した。
- 2) 「都市美観」からの分析：佐藤功一の建築群の設計では、論文である「都市美論」の考え方が取り入れられているとされている。ここには、当時の東京の都市的な要素の分析、今日の景観の概念につながる都市美の萌芽的な思想が垣間見られる。本年度においては、「都市美論」（『中央公論』、1925年1月掲載）の分析を行った。また、ここで一部引用されている、Raymond Unwin: "Town Planning in Practice" および Camillo Sitte: „Der Städtebau nach seinen künstlerischen Grundsätzen“ も適宜参照した。

## 今年度の研究報告（つづき）

### ③研究成果・今後の展望

#### 研究成果

##### 1) 「大学校舎」の平面分析

1925年に立案されたキャンパス計画では、キャンパスの一体的に利用する計画が見て取れる。実施を念頭に立案された1929年の計画では、これは実現できなかったが、建物の機能が集約され、合理的なゾーニングや動線が見られる。また、この「大学校舎」1階でのアーケードによる空間の連続性、建物2、3階中央部のホールが、コモンスペースとしての役割を果たしている。これは、「総合大学の理想」「知の統合」を目指していることを解釈できることを明らかにした。（日本建築学会口頭発表）

##### 2) 明桂寮の建設過程等の解明

本学の寮地区に現存する佐藤功一の作品である「明桂寮」の調査とりまとめから、1925年9月の計画段階から1927年9月の開寮までの経緯を明らかにした。また、内部の建造物調査を行い設計変更箇所、改修部分を確認した。（『総合研究所』紀要第26号）

##### 3) 「都市美論」の分析および設計手法の解明

上述のとおり「都市美論」（『中央公論』1925年1月掲載）は佐藤功一の都市美観に関する基本文献として知られ、いくつかの論考がある。本研究では、改めて「都市美論」の内容を精読し、その多岐にわたる内容を読み取り、近代的な設計手法も含めた包括的な佐藤功一の思想をとらえ、その都市観を明らかにする。（近日中に成果を発表予定である）。

#### 今後の展望

次年度以降においては、現在までに見出した基礎的な史料を用いて、本案をキャンパス・マスタープランとして精査および復原し、その性格に明らかにすることを目的とする。その過程で、佐藤功一が携わった大学キャンパス計画の調査を行い、1920年代の学校施設のあり方を明らかにする。具体的には、佐藤功一が手掛けた早稲田大学、津田英学塾、あるいは地方の女学校の計画にそれが見られるので、その点について、重点的な調査を実施する。

本学泉山キャンパスも現存する佐藤功一による建造物の実地調査および文献調査を、建築、キャンパス、都市といった様々なスケールから分析し、または住教育といった側面から分析し、学校施設を構成する要素や情報を補完することによって、関東大震災後における本学が望んだ学校施設のあり方をより立体的に明らかにする。

これらの情報を統合し、キャンパスを建築群としてとらえた時、都市としての側面を検討し、学問の場所（校舎）、生活の器（寮舎）としての空間、場所としての性質を明らかにする。

以上を、①大学キャンパス一般、②本学の建築、③佐藤功一の作家性を分析するための基礎資料となるべく、学位論文の中核をなすものとして執筆を計画している。

### 3. 成果発表（投稿中も含む）

\* 研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

#### ①雑誌論文

1) 関村啓太、葉袋奈美子、藪下美雪、片山伸也、磯田大輔「明桂寮のアーカイブおよび寮地区の家具」『日本女子大学総合研究所紀要』第26号、pp.106-121、2024年1月

2) 葉袋奈美子、宮崎あかね、関村啓太「これからの日本女子大学寮の検討」『日本女子大学総合研究所紀要』第26号、pp.122-129、2024年1月

#### ②学会・シンポジウム等での発表

1) 葉袋奈美子、関村啓太「本学キャンパス計画から垣間見る教育の変化—屋外空間に期待された学生の学びの場」（成瀬仁蔵研究会、2023年5月10日、桜楓会館）

2) 関村啓太、葉袋奈美子「佐藤功一設計の日本女子大学校舎案の特徴—研究と交流の場を創生するキャンパスプラン」『日本建築学会大会学術講演梗概集・建築デザイン発表梗概集』（F-1分冊）、2023年、pp. 365-368、（選抜梗概、日本建築学会大会、2023年9月15日、京都大学）

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

関村啓太